

アーサー・モリスンの
イースト・エンド三部作（Ⅰ）
— 方法の模索 —

青 木 剛

1. イースト・エンドの「全貌」

アーサー・モリスンのイースト・エンドをめぐる三部作は、このロンドン東部の地域の全貌を示そうとする試みだった。モリスンにとってのイースト・エンドは、細分化された階層によって住む場所も細かく区分された人々が、経済的・社会的な不安定さに翻弄されながら千差万別の生活を営む都市空間である。このようなイースト・エンドの多様性・多面性を作品に表現しようとする姿勢はすでに初期のスケッチに現れ、一冊の短編小説集と二冊の小説からなる三部作を構想する際の基盤となる。モリスンの三部作は、エリザベス・ギヤスケルの『メアリ・バートン』(1848年)と『北と南』(1854-55年)のように、ともにマンチェスターを舞台としながら完全に独立している二作品とも異なり、ロレンス・ダレルの『アレクサンドリア四重奏』(1957-60年)のように、エジプトの都市で起きた一連の出来事を複数の視点から描く四部作とも異なる。モリスンの『みすばらしい通りの物語 (Tales of Mean Streets)』(1894年)に収められた十三編の短編小説、『ジェイゴウの子供 (A Child of the Jago)』(1896年)、『ロンドン市街へ (To London Town)』(1899年)は、共通する登場人物や連続したストーリーを持たず、しかもそれぞれがイースト・エンドの

全貌に不可欠な一部を構成する作品群である。

イースト・エンドをいかに描くべきかというモリスンの模索は、刊行された最初の作品「ホワイトチャペル（'Whitechapel'）」（1889年）において始まっていた。〈切り裂きジャック〉連続殺人事件の直後に発表されたこのスケッチは、ホワイトチャペルについてセンセーショナルに書きたてる種々の言説に対する異議申し立てとして書かれた。イースト・エンドはすでに〈未知の地〉ではなく、スラムや犯罪と同一視する固定観念が広く浸透し、その中心とみなされていたのがホワイトチャペルだった。モリスンにとって、イースト・エンドについて書くことは、こうしたイースト・エンド神話を打破することができる素材と方法を発見することにほかならなかった。スケッチの後半では、その最初の試みが〈ホワイトチャペル巡り〉という形で示される。それは観察者がホワイトチャペルの通りや路地を巡りながら記述することによって、地域の全体像を描こうとするものだった。しかし、この方法は地域の多面性を捉えることには適していたが、路上からの観察という設定自体に対象を外側からしか描くことができない限界があった。また、ホワイトチャペルの負のイメージを打ち消そうとするあまり、裕福な商人たちの存在が強調される一方で、〈普通の人々〉がなおざりにされる点でも、地域の全体像を提示する作品としては物足りないものに終わった。

やがて三部作に発展する確固とした方向性が打ち出されるのは、1891年のスケッチ「ある通り（'A Street'）」である。〈ある通り〉とは、「ホワイトチャペル」で描ききれなかった〈普通の人々〉が暮らすイースト・エンドの平均的な通りのことだ。モリスンは裕福な商人やスラムの住民をひとまず置き、家計は苦しいが、犯罪に走ることもなく、まっとうな生活を送ろうとする人々に焦点を絞ることを選んだのである。

1894年出版の『みすばらしい通りの物語』は、「ある通り」で示された方向性を一連の短編小説として具現したものだ。といっても、「ある通り」がイー

スト・エンドの平均像に重点を置いているのに対して、十三編の短編小説から浮かび上がってくるのは〈普通の人々〉の多様性である。イギリスの中産階級と同様に、イースト・エンドにも細かな階層化が存在し、もともと脆弱な基盤の上に成り立った生活は些細な要因で激変する。『みすばらしい通りの物語』は、貧しいがゆえに上下の差がより切実な意味を持つ階層社会の中で、属する階層が要求する生活水準を必死で守ろうとしたり、階層を這い上がろうと無謀な試みを行ったり、小さなきっかけで階層を転げ落ちたりする人々の悲喜劇をアイロニカルな筆致で描いてゆく。

モリスンは、『みすばらしい通りの物語』の二年後に〈最悪のスラム〉を正面から描いた『ジェイゴウの子供』を、さらに三年後には造船技師に成長する少年を主人公とした『ロンドン市街へ』を出版する。これら三作品が「相補的な関係」にあることは、モリスン自身『ロンドン市街へ』の「はしがき」で明らかにしている。

私は、この物語を『みすばらしい通りの物語』と『ジェイゴウの子供』とともに読まれるべきものとして構想した。実際、これを書き始めたのは、二つの物語が出版された間だった。といっても、これら三冊において、ましてやどれか一冊において、ロンドン東部の生活の全貌を描いたと言うつもりはない。ただ、それぞれが他の二冊と相補的な関係にあるということだ。(Morrison 1899, 'Note')

「ロンドン東部の生活の全貌 (a complete picture)」を描くことが究極の目標だとすれば、〈普通の人々〉を描いた『みすばらしい通りの物語』と、スラムで暮らす最下層の人々を取り上げた『ジェイゴウの子供』が、対象とした階層について相補関係にあることは明らかだ。同様に、『ジェイゴウの子供』と『ロンドン市街へ』のプロットについては、前者がスラム生まれの少年のあっ

けない死で終わる転落の物語であり、後者が少年が自己の研鑽と周囲の助けによって造船技師になる過程を描いたビルドゥングスロマンであるという対称性を見出すことができる。また、主人公たちの変化の過程をたどる『ジェイゴウの子供』と『ロンドン市街へ』がともに300ページを超える作品であるのに対して、イースト・エンドの人々の多様性に注目した『みすばらしい通りの物語』が短編小説集であることも、相補性の例として挙げることができるだろう。こうした相補関係については後に詳しく論じるが、モリスンのイースト・エンド三部作は、それぞれがイースト・エンドのある側面を照射しながら、多面体としての「全貌」を形成してゆくのである。

本稿では、モリスンがイースト・エンドの「全貌」を構築してゆく過程を作品の出版順に検討してゆく（三部作以後に出版されたイースト・エンドを題材にした小説に『壁の穴（*The Hole in the Wall*）』（1902年）があるが、これについては別の機会に論じる）。

現在、モリスンの小説で最も注目されるのは『ジェイゴウの子供』であり、これに『みすばらしい通りの物語』が続き、『ロンドン市街へ』が取り上げられることは稀である。これは、それぞれの作品の完成度や現在の読者に対して持つ意義などを考えれば当然の評価とも言える。しかし、『ジェイゴウの子供』を偏重するあまり、三部作の相補性やその背後にあるイースト・エンドの多様性が忘れられ、モリスンが批判したイースト・エンド神話へ逆戻りする傾向が見られることも否めない。ケヴィン・R・スワフォードは、『ジェイゴウの子供』を「逸脱、犯罪、グロテスクさ」に対する中産階級の恐怖を反映した大衆文化の中に位置づけようとする（Swafford 2002）。モリスンの作品に中産階級と共通する価値観が認められるという論点は重要であり、労働運動などに対する恐怖が読み取ることができるのは確かだが、モリスンが「ホワイトチャペル」で糾弾したものはイースト・エンドに対する恐怖をいたずらに煽る言説にほかならない。これとは対照的に、ロジャー・ヘンクルは、『みすばらしい通

りの物語』と『ジェイゴウの子供』について、自らスラムで暮らした経験をもとにその「むき出しの現実」を表現した最初の作家としてモリスンを評価する（Henkle 1992）。だが、『みすぼらしい通りの物語』はスラムを描いた作品ではないし、モリスンがスラム育ちというのも適切ではない。モリスンの私生活に関する記録はほとんど残されていないが、テムズ川沿いのポプラー（Poplar）で造船所の蒸気機関組立工の息子として生まれたことは分かっている（Keating 1969, p. 11）。つまり、モリスンの家族はイースト・エンドの〈普通の人々〉が暮らす〈ある通り〉の住民であり、その中でも造船所の職工は比較的安定した生活を送るのに十分な収入があった。この意味で、幼少年期のモリスンが『ジェイゴウの子供』のモデルとなったような厳密な意味でのスラムを知っていたかどうかは疑わしい。実際、『ジェイゴウの子供』が長期の取材をもとに書かれたことは周知の事実である。そして、『ジェイゴウの子供』がスラムの「むき出しの現実」を描いていることに異論はないが、その描き方は同時代のセンセーショナルリズムを事とする言説とは一線を画したものであり、両者の違いにこそ目を向けるべきだろう。

2. 「ホワイトチャペル」——イースト・エンド神話に抗して

モリスンの第一作「ホワイトチャペル」は、イースト・エンドの人々に〈文化〉を分け与えるために創設された人民の殿堂（People's Palace）の機関誌『パレス・ジャーナル』に掲載された。編集長のウォルター・ベザントは、イースト・エンド救済を訴える小説『あらゆる境遇の人々——ありえない話（*All Sorts and Conditions of Men: An Impossible Story*）』（1882年）の作者で、人民の殿堂はそこで提案された「喜びの殿堂」を実現するために募られた寄付によって設立されたものだった。「ホワイトチャペル」が発表された当時、モリスンはベザントの下で副編集長を務め、執筆について指導も受けていた。

だが、このスケッチに始まるモリスンの作品には、作品によって慈善活動を促そうとする姿勢は見られない。このことは、モリスンが慈善活動の有効性そのものに懐疑的であったこととともに（Keating 1971, p. 169）、歪曲されたイースト・エンドのイメージが蔓延する中、その本来の姿を示すことが関心の中心にあったことを物語っている。

「ホワイトチャペル」は、この地域をスラムと同一視する「あからさまな描写」を批判することから始まる。

多くの人々は、ひどい悪臭が充満した、恐ろしく汚い迷路だと思っている。通りは、身の毛がよだつ腐敗物が堆積したどぶにすぎず、壁やその他すべてのものは、その場所自体から自然に浸み出す汚れで粘っている。

ディケンズの『ボズのスケッチ集』に収められた「セヴン・ダイアルズ」にも見られる、生理的な嫌悪感を基調にした典型的なスラム描写である。といっても、モリスンはこのようなスラムがホワイトチャペルに実在することを否定しているのではなく、スラムのイメージが地域全体に押し広げられている現状に抗議しているのだ。

モリスンはこれに続けて、スラムのみをクローズアップする言説に二つの傾向を認め、一方はホワイトチャペルを「恐怖のロンドン（Horrible London）」に、もう一方は「見捨てられたロンドン（Outcast London）」に還元するものとする。前者は、窃盗や殺人が日常的に行われる犯罪地帯としてのホワイトチャペルのことである。

人間の形をした害獣で溢れる場所。彼らの仕事は盗みであり、娯楽は殺人である。ローマのものより暗く、曲がりくねり、危険に満ち、邪悪な生活で覆い尽くされたロンドンのカタコンベ。

19世紀中頃まで、イースト・エンドにおいて犯罪を連想させる地区は、おもにテムズ川沿いのラトクリフ・ハイウェイに限定されていた（Keating 1973, pp. 587-589）。当時のロンドン港の中心部に位置していたこの地区は、船荷の組織的な略奪が行われ、船員相手のパブや売春宿が建ち並び、ディケンズの『エドウィン・ドルードの謎』の冒頭で描かれる阿片窟があった場所だった。1811年の連続殺人事件は、ラトクリフ・ハイウェイの悪名を一層高めていた（Newland 2002, pp. 44-45）。しかし、イースト・エンド全体を「救い難い悪の巣窟」とする先入観を定着させたのは、何と云ってもホワイトチャペルの連続殺人事件だった（Curtis 2001, p. 5）。モリスンがイースト・エンドについて書いた最初の作品にホワイトチャペルを選んだのも、このことと無縁ではないだろう。後半で描かれる〈ホワイトチャペル巡り〉のルートには「忌まわしい事件を思い起こさせる」ドーセット通りが含まれ、聖ユダ教会については「この辺りに散らばる、最近、悪魔的な凶行が行われた現場の中心」と書かれている。

もう一方の「見捨てられたロンドン」は、ホワイトチャペルを「憐憫の対象として」描く言説である。

青ざめた宿無したちが、死ぬことが唯一の目的であるかのように這い来る、傾いたボロ屋が広がる荒野。汚い部屋にはそれぞれ数家族が横たわり、父と母と子供たちが互いに飢えるのを見ている。痩せ細り、うつろな目をした不幸な人々は、美しく、勇敢で、価値あるすべてのものから遠ざけられ、麻痺した感覚には、この世の栄光、高貴さ、楽しみも届かず、豚小屋であくせく働きながら、つまらぬ生涯をすり減らしている。

憐憫の対象としてのイースト・エンドの貧しい人々に注目が集まるのは比較的遅い。たとえば、ディケンズが初期の作品で描いた貧困地区は、前述の「セヴ

ン・ダイアルズ』（1835年）や『オリバー・ツイスト』（1837-39年）のサフロン・ヒルなどで、いずれもシティーの西側に位置していた。イースト・エンドが取り上げられるようになるのは、『互いの友』（1864-65年）、『エドウィン・ドルードの謎』（1870年）、『無商旅人』収録のスケッチ（1860-1869年）など、晩年の作品である（松村昌家 2004）。しかし、モリスンが「ホワイトチャペル」を発表する頃までには、イースト・エンドにおいても各種の慈善団体が活発に活動を展開し（Fishman 2001, pp. 230-265）、それを支援する多くの記事やパンフレットがジャーナリストや慈善活動家によって書かれるようになっていた。1880年の代表的なものには、絵入り新聞の『ピクトリアル・ワールド』に連載され、後に単行本として出版されたジョージ・シムズ（George Sims）の『貧しい人々の生活（*How the Poor Live*）』（1883年）、匿名で出版されたが、ロンドン組合教会同盟のアンドルー・メアズ（Andrew Mearns）が著者とされるパンフレット『ロンドンの見捨てられた人々の悲痛な叫び（*The Bitter Cry of Outcast London*）』（1883年）がある。

モリスンが、善意で書かれた「見捨てられたロンドン」系統の言説にも異を唱えたのは、貧しい人々の窮状を強く訴えようとするあまり、各地域の特性を無視することが少なくないために、イースト・エンドをスラムと同一視する風潮を助長している点で「恐怖のロンドン」系統の言説と変わらないためだ。『ロンドンの見捨てられた人々の悲痛な叫び』においてスラムの過密状態を描いた一節は、その典型的な例である。

こうした朽ちて悪臭に満ちた借家では、各室に一家族が住み、二家族であることも珍しくない。衛生設備検査官が、地下室に父親、母親、三人の子供と四匹の豚！がいたと報告した例がある。ある宣教師によれば、別の部屋では、夫は天然痘にかかり、妻は八度目の出産からの回復を待つか、半分はだかで垢まみれの子供たちが走り回っていた。七人が住む地下の台所

では、同じ部屋に死んだ子供が横たわっていた。別の場所では、未亡人と三人の子供のほか、死んで十三日になる子供がいた。辻馬車の御者をしていた夫は、直前に自殺していた。(Mearns 1883, p. 9)

特徴的なのは、それぞれの事例が発見された場所が明記されないことだ。メアズたちの活動は、テムズ川の南岸のパーモンジー、北岸のラトクリフとシャドウエル（この二地域はイースト・エンドに含まれる）で行われていたが、パンフレットの事例報告では地名が挙げられることもあるが、そうでない場合のほうが多い。三地域の状況を順に描いた箇所では、パーモンジーについてだけ詳しく書かれ、残りの二地域については「同様の悲惨な話を繰り返すだけだ」(p. 31)と簡略に済ませている。メアズが訴えようとしたのは、ロンドンのいたるところに極貧地区が存在するということだった。そのためには、地域性にこだわらず悲惨な事例を集め、修辭学という上昇型列挙法（ascending enumeration）を用いて、過密度と悲惨さの度合いが次第に強まるように事例を配列することが効果的だったのである。

これに対して、あくまでイースト・エンドからの視座にこだわるモリスンは、地域の全体像が尊重されるよう主張する。

こうした場所は、確かにホワイトチャペルやその他の地域に存在するが、このような一般化が当てはまることは稀であり、ましてやホワイトチャペルという名前と呼ばれるロンドンの広大な地域に当てはまることはありえない。

モリスンが言うように、ホワイトチャペルの内部でも地区や通りによって経済状態の差があることは、チャールズ・ブースの「貧困地図（'Poverty Map'）」で視覚的に確認できる。この地域には「上層中産階級と上流階級」に塗り分け

された場所は存在しないものの、大通り沿いのほとんどは「中産階級」である。「貧しい」「非常に貧しい」「最下層」は、他地域と比較するとやはり多いが、最も広い面積を占めるのは「充足している」と「充足した者と貧しい者の混在」である（図1参照）。



図1 1889年のホワイトチャペル

Charles Booth's Descriptive Map of London Poverty 1889.

(London Topographical Society, 1997)

「ホワイトチャペル」の後半では、地域の全体像を提示しようとするモリスンの最初の試みがなされる。この〈ホワイトチャペル巡り〉で採用された方法は、ガイドブックや紀行文にもしばしば用いられるもので、観察者＝語り手が対象となる地域を徒歩で巡り、見聞きしたものを順に記述するという体裁をとる。これによって、その地域の多様な側面を拾い上げながら、臨場感とともに、見聞きしたものをそのまま記述したという客観性・公平性を演出することができる。

といっても、歪曲された地域のイメージを正すというモリスンのねらいは、選ばれたルートや記述の重点の置き方に明らかに見て取ることができる。観察者が歩くルートは、チャールズ・ブースが中産階級に色分けした商店が並ぶ「賑やかな」通りと、貧困や犯罪との連想が強い「薄汚い横町」が交互に現れるように選定されるが、〈光と闇〉を同等に扱うことは、〈闇〉のみを語ることの不当性を主張することにほかならない。さらに、モリスンはルートの出発点を最も賑やかな「大通り」（ホワイトチャペル・ハイ・ストリートとホワイトチャペル・ロード）に置き、そこに多くの紙面を割くことによって〈光〉の側面を強く印象づけようとしている。

さらには、ホワイトチャペルの〈光〉を際立てようとした結果、その中間層を取り上げることができないという矛盾が生じている。「ホワイトチャペル」は、〈闇〉について書きたてる言説に対して〈光〉を前面に押し出す論法をとったために〈光と闇〉の二元論に陥り、〈普通の人々〉を持ち出せば、その枠組自体が崩れてしまうからである。

これに加えて、地域の全体像を示すには〈ホワイトチャペル巡り〉という方法自体に限界があった。第一に、通りを巡る観察者の視点は、外側からの視点に留まらざるをえないことだ。ホワイトチャペルにおける「見捨てられたロンドン」の一つであるグレイト・エイリー・ストリート（Great Alie Street）とテントー・ストリート（Tenter Street）の周辺の記述で、観察者は「窓」

から人々の様子をうかがう。

埋もれた地下室ではシャツの縫製。一階では荷造り用の木枠作りか、たぶん紙箱作り。ガラスが割れ、ぼろきれが詰め込まれた上の窓からは、不潔なハゲ頭を垂れて、靴を修繕したり、古着をより分けたりする姿がのぞく。

ガラス窓が割れたテラス・ハウスでは各部屋に別の住人が入り、苦汗制度（sweating system）のもと衣類の縫製を行ったり、木枠や紙箱を作る者もいれば、ホワイトチャペルの名物であった古着を仕分ける者もいる。この地区の特徴を短い文章の中に巧みに盛り込んだ文章といえる。しかし、窓からのぞく光景から、窓の向こう側で営まれる人々の暮らしについて多くを語る事ができないことは明らかだ。

これに関連して興味深いのは、〈ホワイトチャペル巡り〉の方法と、チャールズ・ブースの『ロンドン民衆の生活と労働』の方法に通底するものがあることだ。イースト・エンドを対象に始まったブースたちの研究は、貧困の問題をロンドンのあらゆる地域と階層を含む全体像の中で考察しようとする壮大なものだった。しかし、ロンドン市民の生活のすべての側面について信頼性の高い情報を得ることが不可能なことは言うまでもなく、ブースたちは、おもに家族の人数や収入などの数値化可能なデータと職業のような一定の基準で分類可能なデータをもとに、貧富の度合いを統計学的に測定する方法を採用した。モリスンが〈ホワイトチャペル巡り〉の方法が持つ意味合いをどれほど自覚していたかは別にして、両者は地域の全体像を得るために地域のある側面に集中せざるをえなかった点で共通している。

さらに、〈ホワイトチャペル巡り〉の観察者のまなざしは、ブースの調査員のそれと酷似している。『ロンドン民衆の生活と労働』は、各地区の学務委員会（School Board）が提供する就学年齢の児童がいる家族に関する情報を基

礎データとしていたが（Booth 1887, p. 327），そこから得られた結論を検証するために，調査員が文字通りすべての通りを歩いて調査を行い，その結果が『調査記録簿（*Survey Notebooks*）』に残されている。しかし，『調査記録簿』には，調査員が直接住民から聞き取りを行ったり，住宅の内部を自ら調査したりした形跡はなく，記されているものの大半は路上からの観察である。先に引用した「ホワイトチャペル」の一節と同じ地区を調査した記録では，「仕立屋，古着屋，靴屋」のような住民の職業とともに，「窓はきれいだ」あるいは「窓は割れて，汚れている」という記述が繰り返される（Booth 1898）。ともに地域の全体像を視野に置いた「ホワイトチャペル」の観察者と『調査記録簿』の調査員は，汎用性が高く，外から確認できる指標を求め，それを同じものに見出していたのである。

〈ホワイトチャペル巡り〉の方法論的な限界のもう一つは，それが〈光と闇〉の両面を取り上げることはできても，外側からの視点に留まるために，両者の関係にまで踏み込むことが困難なことである。「ホワイトチャペル」以後のモリスンの作品において，イースト・エンドの〈光と闇〉の関係性は重要なテーマの一つであり，多くの場合，階層間の隔たりという形で現れる。「ホワイトチャペル」では，「地方都市の目抜き通り」に匹敵する「大通り」に乗合馬車と鉄道馬車がひしめき合い，通りに面して鉄道の駅が四つあることが書かれる。しかし，『みすばらしい通りの物語』の「ボウ橋へ（‘To Bow Bridge’）」では乗合馬車に無賃乗車する人々が描かれ，「一文無し（‘Without Visible Means’）」ではドックのストライキで収入源を失った労働者が職を求めて徒歩で北部の工業都市に向う。イースト・エンドの貧しい人々には，日常的に公共交通機関を利用する経済力はなかったのである。同様に，大通りの「商売上の高い評判」を博している例として，「遠い昔」に開設された肉市場，二軒の老舗の古本屋，1570年創業の教会の鐘の鋳造場などが紹介されるが，これらも貧困層にはほとんど無縁のものである。「ある通り」では，イースト・エンドの中間層でさ

え少数の例外を除いて「活字を読むことはない」とされる。『ジェイゴウの子供』に描かれるスラム生まれの少年が肉を口にすることは稀で、牧師の紹介でようやくホワイトチャペルの雑貨屋に就職した時も、盗みの濡れ衣を着せられ、たちまち解雇される。貧しい人々にとって、大通りに並ぶ商店は客としても使用人としても遠い存在であった。

このように、「ホワイトチャペル」における地域の全体像を示そうとするモリスンの最初の試みは、方法と実践の両方で不十分なものに終わっている。しかし、イースト・エンド神話に対抗するためには地域全体を視野に入れた方法が必要だという認識はこれ以降の作品にも受け継がれてゆくのである。

3. 「ある通り」——全体像から平均像へ

『パレス・ジャーナル』にイースト・エンドにおける貧富の対照性をモチーフにしたスケッチをさらに二編発表したモリスンは、『マクミランズ・マガジン』のために書かれた「ある通り」で、再びイースト・エンドをいかに描くかという課題に立ち帰る。〈ある通り〉とは、名前を伏せられた特定の通りではなく、イースト・エンドの「どこにでも」見られる平均的な通りのことである。これは、地域の全体像を示そうとした「ホワイトチャペル」と比較すると、そこで糾弾された「一般化」への後退とも見える。しかし、「ある通り」の冒頭でも「この地域の付随的な特徴を誇張する歪んだイメージ」が批判されるように、イースト・エンドの脱神話化がねらいであることに変わりはない。同じ目標のために全体像から平均像へと戦術が転換されたと見るべきだろう。

モリスンは、この〈ある通り〉を住民の職業や住宅などについて詳細に規定している。

この通りに住む人々は、ドックか、ガス製造工場か、テムズ川に面した残

り少なくなった造船所のどこかに勤めている。一軒に二家族が原則であり、それぞれの壁にうがたれた四つの穴の向うには六部屋ある。ただし、「若い男性の下宿人」を置いたり、成長した息子たちが部屋代と食費を入れたりする場合は一軒に一家族となる。（Morrison 1891, p. 460）

まず、世帯主の職業として、ロンドン港に数多く存在した船荷の積み下ろしを行うドックで働く担ぎ人夫、石炭ガス製造所の労働者、当時すでに衰退しつつあったテムズ川沿いの造船所の職工の三つが挙げられる。これらの職業は、求められる熟練度、賃金、安定性については差があり、徒弟修業が必要とされた造船所の職工の賃金は比較的高く、安定していたが、ドックの担ぎ人夫は定職化していた一部のものを除き基本的に日雇いで、仕事にあふれることも少なくなかった。しかし、〈ある通り〉の世帯主は、いずれも犯罪に走ることも慈善団体の援助を受けることもなく、乏しい収入で家族を支えようとする労働者である。次に、〈ある通り〉の住宅は地下室のないレンガ造り二階建ての家が横方向に連結されたテラス・ハウスで、一階にはドアと窓が一つ、二階には窓が二つあり、それぞれの階には表から裏へ三部屋が続いている。一軒に二家族というのは、一家族が各階の三部屋を使用していたということで、一部屋に一家族以上が暮らすスラムとは明らかに異なる。しかし、〈ある通り〉の両側にはこうした住宅が四十軒から六十軒連なり、「馬屋」のような外観を呈し、中産階級向けのテラス・ハウスがつくりだす街並みとの差は大きい。

このようにイースト・エンドの平均的な通りに焦点をしぼることは、その上下に位置する階層を捨象することにはほかならない。〈ある通り〉からは、スラムの住民だけでなく、「ホワイトチャペル」に描かれたような大通りの商人も除外される。そればかりでなく、〈ある通り〉の「角」にある「パン屋」「食料雑貨店」「ビール・ショップ」でさえ、モリスンは通りの「住民」に数えることはしない。もちろん、対象をイースト・エンドの〈普通の人々〉に限定する

のは戦略的なもので、モリスンが他の階層に興味を失ったということではない。階層によって生活が大きく異なる地域に向き合ったモリスンは、まずその中核をなす階層に集中することを選択したのだ。この戦略にしたがって書かれたのが『みすばらしい通りの物語』にまとめられる一連の短編小説で、次章で論じるように、それらはいずれも〈ある通り〉の住民をめぐる作品である。

実際、「ある通り」は加筆のうえ『みすばらしい通りの物語』に序文として収められる。そして、この加筆部分には、モリスンが十三編の短編小説を書く過程でイースト・エンドの細分化された階層に対する認識を深めていったことをうかがうことができる。

通りを向こう側に進み角を曲がると、ここほど体面を守ることに気を遣わない通りに出る。最初の通りでは「洗濯物のしわ伸ばします」と書いたものが窓からのぞき、玄関のドアが無頓着に開け放たれている。その先の通りでは、むさくるしい女たちが戸口の上がり段に腰をおろし、若い娘は白いエプロンをつけて工場に行く。この通りと近くのスラムの間では、角を曲がるごとに世間体は軽んじられてゆくのだ。(Morrison 1894, p. 10)

玄関のドアの状態は、ブースの調査員の『調査記録簿』にも用いられる指標の一つで、〈閉じている〉〈開け放たれている〉〈戸口に座るものがある〉という順で階層が下がる。モリスンもこれに従って、〈ある通り〉と「最初の通り」と「その先の通り」の階層の違いを表現しているのである。

女性の仕事と階層の関係は、成長した後も親と同居する息子たちに触れた個所の後に付け加えられた一節でさらに詳述される。

成長した娘について言えば、できるかぎり早く結婚する。家政婦となることは身を落とすことであり、婦人帽製造とほとんど変わりはないが、婦人

服仕立なら自尊心に反することはない。家政婦をしても良いという娘は、通りの外れにある曲がり角の辺りの、洗濯物のしわ伸ばしが行われているところでは見つかるかもしれない。工場に勤める娘は、さらに遠くのスラムの周辺に住んでいる。(p. 11)

〈ある通り〉では女性は家事に専念すべきものとされ、外に働きに出ることは許されない。内職をする場合は、女性の〈たしなみ〉としての裁縫の延長線上にある「婦人服仕立 (dressmaking)」は黙認されるが、分業化され単純な賃仕事となった婦人帽製造 (millinery) は行ってはならない。これに対して「最初の通り」では「洗濯物のしわ伸ばし」が行われ、家政婦になる娘もいる。そして、女性の工場勤めは「その先の通り」に限定されるのである。モリスンは働く女性を『ロンドン市街へ』などで肯定的に描いているが、〈ある通り〉の住民は、女性は家庭にというヴィクトリア朝の女性観を中産階級と共有しているのだ。

モリスンがこのような細かな階層区分にこだわるのは、イースト・エンドの人々にとってそれが大きな意味を持っていたからにほかならない。〈普通の人々〉とその下の二つの階層に属する人々を対象にした『みすばらしい通りの物語』は、彼らの階層意識、階層間の上昇と下降、それぞれの階層を背負って行動する人々の関係などのモチーフを核にして展開されてゆく。

参考文献

- Booth, Charles. 1887. 'The Inhabitants of Tower Hamlets (School Board Division): Their Condition and Occupation'. *Journal of the Royal Statistical Society*, Vol. 50, No. 2, pp. 326-401.
- _____. 1898. *Survey Notebooks*, B351, pp. 50-78. Available from http://booth.lse.ac.uk/cgi-bin/do.pl?sub=display_page_check&args=b351,51; accessed 20 September, 2009.

- Curtis, J. P. 2001. *Jack the Ripper and the London Press*. New Haven: Yale University Press.
- Fishman, W. J. 2002 [1988]. *East End 1888*. London: Hanbury.
- Henkle, Roger. 1992. 'Morrison, Gissing, and the Stark Reality'. *Novel: A Forum on Fiction*, Vol. 25, No. 3, pp. 302-320.
- Keating, P. J. 1969. 'Biographical Study'. In *A Child of the Jago*, ed. by P. J. Keating. London: Macgibbon.
- _____. 1971. *The Working-Classes in Victorian Fiction*. London: Routledge & Kegan Paul.
- _____. 1973. 'Fact and Fiction in the East End'. In *The Victorian City: Images and Realities*, ed. by H. J. Dyos and Michael Wolff. London: Routledge. Vol. 2, pp. 585-602.
- Mearns, Andrew. 1883. *The Bitter Cry of Outcast London*. London: James Clarke.
- Morrison, Arthur. 1889. 'Whitechapel'. *The Palace Journal*. Available from <http://www.mernick.org.uk/thhol/palwhite.html>.
- _____. 1891. 'A Street'. *Macmillan's Magazine*, Vol. 64, pp. 460-463.
- _____. 1894. *Tales of Mean Streets*. London: Methuen.
- _____. 1899. *To London Town*. London: Methuen.
- Newland, Paul. 2002. *The Cultural Construction of London's East End: Urban Iconography, Modernity and the Spacialisation of Englishness*. Amsterdam: Rodopi.
- Swafford, Kevin R. 2002. 'Translating the Slums: The Coding of Criminality and the Grotesque in Arthur Morrison's *A Child of the Jago*'. *The Journal of the Midwest Modern Language Association*, Vol. 35, No. 2, pp. 50-64.
- 松村昌家. 2004. 「ディケンズと世紀末 — イースト・エンドと関連して —」. 『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』, 第 27 号, 120-126 ページ.